

解 説

一

藤原定家の家集「拾遺愚草」の自筆本が冷泉家に伝えられ、冷泉為臣氏によって昭和十五年『藤原定家全歌集』として翻刻刊行された。これは、自筆本「拾遺愚草」および嘉禎三年の奥書のある員外を主要部分とし、それに冷泉為久の遺編「拾遺愚草員外之外」と、冷泉為臣氏の増補を加えたもので、定家の歌集としては現行活字本中でもっとも歌数が多く、また信用すべき本でもある。しかし、この本には誤読および誤植がかなり多く、また為臣氏が早く亡くなられたので改訂の機会を失ったままに長いこと自筆本の公表が待たれてきた。幸い、書陵部に自筆本の忠実な転写と思われる冷泉為村本の「拾遺愚草」が伝えられているので、自筆本に代る善本としてこれを採用することにした。

いうまでもなく家集という性格をもっとも完璧な形で具備したものは、作者の手によって編纂され、清書された定稿本であろう。そのような意味合において、「拾遺愚草」は、ある時点において定本をもっていたといえることができる。それ以外に捨てるには惜しい歌がやはり定家の手によって集められ、「いたづらごとにや」「今みればうたにてもなかりけり」「これらはかきとゞむべきものにあらねど筆をだにそめあへぬみだりがはしさも中々やうかはりてやとて」などの注をつけて一括されたのが「拾遺愚草員外」である。

その後、後人の手によって定家が草稿の過程で切り捨てた歌を取り上げて押紙にしたり、また他の文献に散在する定家作を探し出して来て補入したりする作業がおこなわれ、家集が辿る一般的運命を「拾遺愚草」も辿ることになる。とくに中世以降の定家崇拜は、おびただしい偽書群とともに偽作や仮託の歌を出現させ、また、他人の歌を定家名で

発表することが流行した。そこで、定家の真作を集めると並行して誤謬を訂正し、異本を校合して標準となるような本文を設定しようとする努力がおこなわれてきた。風巻景次郎氏の「定家歌集補遺の研究」(昭和六年・同十一年)や冷泉為臣氏の『藤原定家全歌集』の編集はその画期的な業績であった。その後も後述するごとく石田吉貞氏・安田章生氏・樋口芳麻呂氏・有吉保氏・久保田淳氏などによってその検討はつづけられている。新資料が発見されて定家の歌が増補される一方、定家作とされていたものが他人の作であることが判明してゆく。むしろ後者の場合が今後の課題の中心になるのではないかとさえ予測されるのである。

本書の編集は、索引のための本文設定であるので、一首でも多く定家の歌を集めようという方針を取ったため、明らかに他人作と認められた場合のみ括弧を付して区別したが、存疑のものはそのまま残そうとした。しかし、一つの作品として定家の家集を研究する場合にはこのような全歌集としてではなく、定家自身の手で完成された定本を対象とすべきことはいうまでもないことである。

石田吉貞氏は、「拾遺愚草の検討」(学苑、昭和三十二年一月)において、「拾遺愚草」の完成を天福元年以後、すなわち出家後とみられ、「定家自筆本冷泉家蔵拾遺愚草が、一首の追加挿入の痕もなく、十全な完成の形をもって定家自身の手で書かれているのは、彼自身の手で立派に完成したことの記念をとどめたものと見るができるであろう。」と語っておられる。また氏は、岩波文庫本を自筆本の草本であるとされ、六家集本は自筆本に後人の増補が加えられない前に書写されたものであることを実証されている。

自筆本の忠実な書写である延享三年書写の底本には、「兼日蒙仰拾遺愚草三帖以伝来之証本令書写献之 延享三年八月二十日右兵衛督 藤原為村」と奥書がある。書体も定家を模し、『全歌集』の巻頭に掲げてある自筆本の写真と比較してみると、自筆本の二行書を一行書にするために、仮名を漢字に改めている所があるが、それ以外はきわめて似ている。押紙の部分三個所二十七首(二五七八・二五八九)・二五八九・二六〇〇―(二六一三)は写されていない。これに

よって、為臣氏のように、押紙を定家自身が行なった増補と見るのは誤りではなからうか。勅勘に関する二十七首を定家は自筆本に採らなかったが、後人が増補したのではないかと思われる。為村が自筆本を書写させた延享三年に押紙はなかったのであろうか。あるいはあっても筆者が後人の所為と判断して写さなかったのか。多分前者ではなかったかと考えられる。すなわち、延享三年以後に、誰かが自筆本に押紙を付した。しかしそれを草稿本関係の本からと断定するのも根拠が薄弱なようである。

二

「拾遺愚草」の諸本は大別すると、自筆本系統・名古屋大学本系統（岩波文庫本の底本）・六家集系統（国歌大観の底本）の三つに分けることができる。それぞれの性格については、成立の過程や書写の経路などが入り組んでいて、そう簡単に位置づけを施すことはできないが、自筆本を基準にして比較してみるとつぎのようになる。

名古屋大学本は、伊勢の来田氏旧蔵のもので、他本に比してもっとも自筆本に似ている。押紙の部分三個所二十七首が本文中に含まれ、自筆本にない「あともなし」（補遺四五七六）が、一三四八の次に入り、「ふるさと」（二五五四）が、一三四六の次に重出している。また配列の順序がつぎのように自筆本と四個所異同がある。

- 1、一四三五・一四三三・一四三四の順、
- 2、一五二八が一五三二の次、

- 3、（二四〇八）・二四一一・二四〇九・二四一〇の順、

- 4、三三二八・三三二七・三三二九の順、

原本を見ると、書き方がかなり乱れており、石田吉貞氏が草稿本と推定されるのもっともと思われるふしがある。しかしさらに精密な調査をしないとそのように判定することはできないようにわたくしは考える。たとえば、「韻歌

百二十八首」の末尾は四首換韻で漢字の韻を揃えたものであるが、名大本の順序の異同であげた、一五二八が一五三二の次というのは、韻の揃え方としてはまずい。すなわち、**魚**が三首つづき、**虞**が四首つづいて、そのあとへ**魚**が一首くることになるが、この一五二八はどうしても前の**魚**の中へ入らなければならない。外にも二首ほど漢字の書き方に違いがある。このことは書写の際の崩れと見るべきなのであろうか。草稿本としては不正確な感がないでもない。静嘉堂に宗祇の筆になるものがあり、書陵部にもこれと同系統のものがあるが、ともに中巻が欠けている。

つぎに六家集本であるが、現行活字本では、国歌大観・有朋堂文庫・国民文庫・国歌大系などに収められている。国歌大観本と他の三本は多少異なり、押紙の増補二十七首は四本共に欠けており、員外末尾に追加してある「大方に」（三六六二）の歌が、国歌大観・国民文庫・国歌大系の三本（有朋堂文庫は員外欠）では、三三七一の次に入っている。また員外のあるこの三本は、藤川百首・為家百首を巻末に掲げている。国民文庫・有朋堂文庫・国歌大系の三本は、一七九・三四七・五三一・一七九三・二二二六・（二四〇八）・（二六七九）の七首が脱落しており、共通の誤読も多い。六家集本で信用すべき本は国歌大観本であるが、自筆本と比べるとつぎのような異同がみられる。

- 1、二五〇一・（二五〇〇）の順、
- 2、二五五九・二五五八の順、
- 3、三六六二が三三七一の次、

押紙の二十七首がないのは為村本と同様である。

この外に、押紙の部分を含む京都大学蔵谷村本や、栗原司氏によって紹介された為之奥書本の「拾遺愚草」（「為之奥書本拾遺愚草の覚書」国学院雑誌、昭和三十一年六月）の検討も必要になってくるであろう。

三

員外には自筆本が残っていないが、定家の手によって「拾遺愚草」の付録として編まれたであろうことは推測できる。員外の目次の後に「已上片時終篇狼藉左道依有其恥雖不加入家集其中一両首撰取哥仍追書入草子奥」とあって、編纂の意図を明かしている。『藤原定家全歌集』では嘉禎三年九月廿三日書写奥書のある本を底本にしており、定家の正本を以って校合しているが、この本は韻字四季哥で終っている。為臣氏は定家自身が嘉禎三年以後堀河題百首を書き加え、藤川百首はその後誰か知られない人によって加えられたとしている。本書の底本としては書陵部蔵の正徹本を用いたが、やはり、藤川百首は加えられていない。定家の詞として、堀河題百首の後に、「是猶不足言哥也後鑒有恥」が記されており、奥に

雑哥之中竄末百首尤可秘処也

後は為証本也

正徹 在判

以老僧自筆本書写

校合畢

正広 在判

と書写奥書がある。この本は『全歌集』が底本として用いた嘉禎三年奥書本系統の本と校合しているらしく、イと傍記してあるのに一致している。『全歌集』ではさらに吉沢本と校合しているので、本書も吉沢本を参照した。藤川百首は岡山大学所蔵の板本六家集を底本にしたが、東北大学蔵狩野文庫「詠百首和歌」・書陵部蔵「定家卿百首和歌」・同「難題百首」を参照した。

四

「拾遺愚草員外之外」は、『全歌集』の順序に従ったが、その典拠は全面的に原典に当って改めた。基本資料の所在のリストはつぎの通りである。

一、自筆遺草——『藤原定家全歌集』

二、明月記

① 国書刊行会本

② すべて原本通りであるが、原本にない前書で、『全歌集』によったものは「」で示した。

③ 部分的に『全歌集』によって訂正したものは「」として傍記した。

三、撰集

1 勅撰集

① 国歌大観本

② すべて原本通りであるが、原本にない前書で『全歌集』によったものは「」で示した。

③ 原本の前書を他の資料で訂正補足した場合は（ ）で示した。

④ 『藤原定家全歌集』に見える歌の異同についての傍記はそのまま残した。

2 月詣和歌集——統群書類従三百六十八

3 拾遺風体和歌集卷六——統群書類従三百七十

4 二八要抄——統群書類従三百七十四

5 和漢兼作集——『御所本和漢兼作集』（笠間影印叢刊23）

- 6 玄玉和歌集——新校群書類従百四十九
- 7 雲葉和歌集——新校群書類従百五十二
- 8 新和歌集——新校群書類従百五十三
- 9 万代和歌集——丹鶴叢書本
- 10 夫木和歌抄——国書刊行会本
- 11 六家抄中拾遺愚草抄——『藤原定家全歌集』
- 12 檜葉和歌集卷第十二——樋口芳麻呂編『檜葉和歌集と研究』（未刊国文資料）
- 13 御裳濯和歌集——碧沖洞叢書（神宮文庫）本

四、諸家集

- 1 秋篠月清集——古典文庫（教家本）
- 2 拾玉集——多賀宗隼『校本拾玉集』
- 3 玉吟集——久保田淳『藤原家隆集とその研究』
- 4 明日香井集——新校群書類従二四二
- 5 藤原隆信朝臣集——新校群書類従二五八
- 6 寂蓮法師集——新校群書類従二六九
- 7 建礼門院右京大夫集——新校群書類従二八〇
- 8 如願法師集——冷泉為臣編『時雨亭文庫』(一)
- 9 前権典厩集——冷泉為臣編『時雨亭文庫』(一)
- 10 露色随詠集——桂宮本叢書二十卷『時雨亭文庫』(一)により校訂

11 土御門院御百首——続群書類従三百八十六

12 俊成卿五杜百首

桂宮本叢書四卷所収の「五杜百首」(長秋草)により、前書・注記は『藤原定家全歌集』のものを用了。また

「ことのはのくちせぬ松のはかなきに又立かへるはるをみせはや」の歌は、続拾遺集に為家の詠としてみえる
 「言のはのかはらぬ松の藤なみに又立ちかへる春をみせばや」(五二九)に類似し、定家詠とすべきかどうか不審であるが、『藤原定家全歌集』によってこれを残した。桂宮本叢書には、一丁目の表から裏にかけて、「事のはのくちせぬまつのはかなきにこすゑにかへれたのふちなみ」とある。これは俊成詠として続拾遺集に見える「かすかやまたにのまつとはくちぬともこすゑにかへれたのふちなみ」(五二七)の下句と混同したものである。一方この五杜百首には、一丁目の表に、「かすかやまたにのまつとはくちぬとも又立帰はるを見せはや」という歌があり、先の定家詠として掲げた「言のはの」の歌の下句を混同している。

13 家長日記——石田吉貞校訂古典文庫『家長日記』

14 最勝四天王院御幸和歌——続群書類従四〇一

五、歌合

1 治承二年三月十五日別雷社歌合——平安朝歌合大成八

2 文治二年十月廿二日歌合——桂宮本叢書十四卷

3 建久六年正月廿日民部卿家歌合——新校群書類従一八九

4 正治二年十月一日歌合——続群書類従四〇九

5 正治二年三百六十番歌合——続群書類従四〇八

6 建仁元年三月廿九日新宮撰歌合——新校群書類従一九一

7 建仁元年八月三日影供歌合——新校群書類従一九二

8 建仁二年五月廿六日鳥羽城南寺影供歌合——新校群書類従一九二

9 建仁二年六月水無瀬釣殿当座六首歌合——新校群書類従一九二

10 元久元年十一月十一日北野宮歌合——新校群書類従一九四

11 元久元年十一月十日春日社歌合——桂宮本叢書十四卷

12 建永元年七月廿五日卿相侍臣歌合——新校群書類従一九四

13 建永二年三月七日鴨御祖社歌合——新校群書類従一九四

14 建永二年三月七日賀茂別雷社歌合——新校群書類従一九四

15 建保五年四月廿日歌合——新校群書類従一九七

16 建保五年六月定家卿百番自歌合——続群書類従四一三

17 建保五年八月十五夜右大將家歌合——新校群書類従一九七

18 建保五年十一月四日内裏歌合——新校群書類従一九七

19 寛喜四年三月廿五日石清水若宮歌合——新校群書類従一九八

20 貞永元年八月十五夜内裏三十五番名所月歌合——新校群書類従一九八

21 定家家隆両卿五十番歌合——新校群書類従二一六

22 正治二年九月歌合廿四番——桂宮本叢書十四卷

23 宮河歌合——新校群書類従、平安朝歌合大成八卷参照

六、その他

1 建保五年書写古今和歌集奥書——『藤原定家全歌集』

2 秘抄奥書——『藤原定家全歌集』

3 徹書記物語——日本歌学大系五卷

4 東野州聞書——日本歌学大系五卷

5 古今著聞集——日本古典文学大系

七、伝定家卿詠歌

イ 遺詠

未来記——日本歌学大系第四卷

雨中吟——日本歌学大系第四卷

源氏物語卷名和歌——山岸德平「源氏物語研究の初期」(国語と国文学、大14年11月)

ロ 存疑篇

定家卿自歌合

① 新校群書類従二二〇

② 四一八九の次「いさり火の」の歌に番号が欠けているので、四一八九の歌を四一八九の一とし、「いさり火の」を四一八九の二とする。

鷹三百五十一首

『藤原定家全歌集』により、新校群書類従三五七と対校する。

八景和歌——『藤原定家全歌集』

三十六貝歌合——『藤原定家全歌集』

五

「定家歌集補遺」は『藤原定家全集』の後に発見されたものを追加したものであるが、この作業は無限につづけられなければならないであろう。

四五七六——名古屋大学本・静嘉堂文庫本・書陵部別本に二三四八の次にある。(注参照)

四五七七——風巻景次郎氏は、「拾遺愚草」および「同員外」に見えない定家の歌を蒐集され、二百三十九首を追加された。その後、冷泉為臣氏が『全歌集』を編んでそれらを包摂したが、中に一首この歌のみ重複していない。

この歌は三八四九の類歌で、新校群書類従一九七に見える。

四五七八——安田章生氏のご教示。

四五八三・四五八四——日本大学人文科学研究所「研究紀要」第一三号抜刷。有吉氏は二十首の中四首を「若し定家の詠であるとすれば、新しい資料ということになる」と示されたが、その後樋口芳麻呂氏によってその中の二首が他人の詠であることが判明した(和歌史研究会会報第43号「定家卿枕屏風歌について」)。

四五八五・四五九二——久保田淳氏によって発見された資料である。仁和寺宮五十首の草稿本に誰かが評を加え、さらに定家が推敲したもので、作品の形成過程がうかがわれる興味ある資料である。五十一首の内、九首詠み替え・さし替えがあつて現存の五十首の形になったが、除去された八首が新出歌ということになる。

四五九三・四五九八——六花和歌集には、定家名で入集している歌が一四七首あるが、その中には他人の作が一八首含まれ、すでにわかつている歌を除くと、六首の新出歌を得ることができる。これらがもし定家の作であるとすれば新しい資料ということになるであろう。

四五九九・四六〇一——定家作といわれる東大国文研究室蔵「和歌秘書」の例歌の中から、久保田氏によって定家

作と認定されたものである。和歌懷紙の書様を解説したものの一部を翻刻紹介されたもので、定家の和歌の書様を窺う資料としても興味深い。四五九九は『藤原家隆集とその研究』に、四六〇〇、四六〇一の二首は「中世文学」十七号に発表された。

六

最後に、全歌集における重出歌および類歌をあげておこう。

一、重出歌

みよしのやたきつかはうちの春の風神世もきかぬ花そみなさる（一八七一・三八八一みよしのの）
つかのまもわすれんものか出かてに月をしほりしそてのわかれば（三七〇五・三八四四）
たましゐもわか身にそはぬなけきして涙久しき世にそふりにし（三七三一・三八四七）

月のゆく雲のかよひちかはれとをとめのすかたわすれしもせず（二三三七）・（三八二八）

二、類歌もしくは異伝

〔冬〕冬の夜のむすはぬゆめにふしわひてわたるをかは、氷ゐにけり（九六三）

〔冬〕冬の夜の結はぬ夢にふし侘て涙の川は氷ゐにけり（三八八九）

〔おき〕おきのはもしのひ／＼にこゑたて、またきつゆけきせみのは衣（九三三）

〔萩〕萩の葉も忍ひ／＼にこゑたて、まかき涼しき蟬のは衣（三八八七）

〔春〕春をへてみゆきになる、花のかけふりゆく身をもあはれと思ふ（二〇六八）

〔年〕年をへてみゆきになれしはなのかけふり行身をもあはれとやおもふ（三九七二）

いは浪のひ、きはいそくたひのいほをしつかにすくる冬の月かけ（二七〇三）
 たきかはのひ、きはいそく旅のいほをしつかにすくる冬の月影（三七九八）

をとめこのわすれぬすかた世、ふりてわか見しそらの月そはるけき（二三二八）
 忘れぬ少女の姿世々ふりてわかみし空の月そはるけき（三八二八）

大空にたかぬく玉のをたえしてあられみたる、のへのしのはら（三八四九）
 天つ空たがぬく玉に緒絶えして霰乱るる野辺の篠原（四五七七）

梅の花かすかにかをる春の夜はくもるも月の光なりけり（三八六二）
 桜花霞にかはるはるのよはくもるそ月のひかりなりける（三九八七）

後記

定家歌風の分析に用立てるために作っていた全句索引をタイプ印刷にして世に送ったのは十年前であつた。その底本にした冷泉為臣篇『藤原定家全歌集』は、自筆本を主要部分としたもつとも拠るべきものと思われ、疑問とする点が多い上、入手が困難になつてきている。一方全句索引の方も拙い仕事にもかかわらず利用してくださる方が多く、その需要に応じかねるようになった。折しも、笠間書院の求めがあつたので、その後つづけて来た調査を生かしたこのような体裁のものを作つてみた。現在の段階で出来るだけの努力は試みたと思う。今後残された課題としては自筆本の翻刻、名大本系・六家集本系との校合などがあり、存疑の歌の検討や新資料の蒐集もつづけられなければならないであらう。

文献調査の便を与えられた書陵部・名古屋大学・京都大学・京都女子大学・東北大学に感謝するとともに、本書実現のためにご助力くださった橋本不美男氏・藤平春男氏、笠間書院の池田猛雄氏に対してもお礼を申し上げたい。また、注や解説で取上げさせていただいたように、未発見の歌を教えてください、また新資料を提供してください、といった方々の学恩に対して心からの感謝を述べたい。索引と校合の仕事の協力をしてくださった齋藤田鶴子さん、本文の清書と読み合わせを手伝ってくださった太田則子さんに対してもこの場を借りて感謝の意を表わしたい。

昭和四十八年一月十日

赤羽 淑